

# 出会いはタカラモノ

## 子どもから教えられたことばかり

### 最終回 出会えてよかったあ



佐藤比呂二

さとう ひろじ／東京都生まれ。特別支援学校教員。編著書に『ホントのねがいをつかむ—自閉症児を育む実践』（全障研出版部）など。

## ねがいと納得

この連載もとうとう最終回。これまでに、こだわりに打ち勝とうと葛藤するソウちゃんやママへの他害に自ら歯止めをかけようとしたレイ君たちの姿から「子どもはねがいによって自ら変わる」ことを教えられたと紹介してきました。

がんセンターで出会ったタツヤ君（自閉症、知的障害）も忘れられない存在です。高校時代は特別支援学校の重度重複学級に在籍。卒業後、脳腫瘍を発症し、その後二十歳のときに再発がみつかりました。いるか分教室の対象ではなかったのですが、病院ボランティアのシスターが「ぜひ、かわってください」と出会わせてくれました。

絵を描くのが大好きなタツヤ君。頭に大きな手術痕があり片方の眼球は失われていましたが、残された片目で一生懸命描いていました。私も一緒に病室で描いていると、好きな電

車やキャラクターをリクエストしてくれ楽しいやりとりが生まれました。

授業の合間や放課後に彼の病室に顔を出すのが私にとってもしみひたしなひとときになっていましたが、そんな時間は長くは続きませんでした。知り合って2ヵ月足らずで彼は亡くなったからです。

知らせを受けて駆けつけたときのママの言葉が忘れられません。

「学校時代が一番きつかったです。先生からはだめなところばかり言われて。卒業してようやく少し落ち着いたら病気になってしまいました。病気はつらかったけど…でも、入院してからすごく評価が上がったんです。しんどいときは『おかあさん、背中をさすってください…ありがとう』って言うてくれて。どんなに痛い治療でも『いやだ』とか『やめて』とか一切言わなかった。そして、処置のあとは必ずお医者さ

んや看護師さんに『ありがとうございました』って頭を下げていました」

私にはとても想像の及ばないがん治療の痛みやつらさ。病気を治したい「ねがい」とつらい治療は病気を治すためという「納得」があればこそ、タツヤ君は最期まで弱音を吐かず闘い抜き、医療者やママへの感謝も忘れなかったのでしょう。

最後にママが力強く言いました。「タツヤは自慢の息子です」学校時代に言えたらよかったのに。そう言える学校生活をつくるのが私たちのやるべきこと。「ねがい」を育み「納得」を生み出すことがどんなに大事なことが。タツヤ君からの教えが心に刻まれます。

## 実践記録を通つて出会う直す

出会った子どもたちが教えてくれた大切なことの数々。気づくことができたのは、その時々のかかわりを自分なりに綴り残してきたからだと思えます。そして、私が実践記録を書いてこられたのは、愛知の竹沢清先生との出会いがあればこそです。

先生と出会ったのは、私がまだ教員になって間もない頃に聴いた講演会でした。「こんなにも子どもの心を深く読み解き、子どもを主人公にする教師が本当にいるんだ」と圧倒され、それ以来、私にとって憧れの存在になりました。

教研のときなど、とにかく声をかけて…ただ当時の私には語れるような実践はなにも一つなく、好きな漫画の話や学生時代のおかしなエピソードばかり一方的に話してしま

た。それでも先生は「東京には変わった若いのがいるな」と笑顔で受け止めてくださっていました。

私は30代後半の頃、初めて全国教研にレポートを出しました。この連載でも紹介したシユン君の実践です。周囲からの「甘やかしてる」という声に応えたい思いで書きました。

すると、その後すぐに竹沢先生から手紙が届いたので。初めていただいた突然の手紙。ドキドキしながら封を切ると次のような言葉が目飛び込んできました。

「家に帰りすぐレポートを読ませてもらいました。さすが佐藤さん。おもしろいね」「私の考えていることを佐藤さんの実践に即して述べていると思いました。そしたら、私の書いたレポートを送りたくくなりました」

その文面に感激し、同封されていたレポートを夢中で読んだことを思い出します。

それ以来、子どもとのかかわりで「ハッとしたこと」「なぜ?」と思ったことなどを少しずつですが書き留めるようになりました。

そして、「書くことで意識でき、意識できるから気づける」ということを知りました。

目に見える行動の裏にある子どもの思いをどう汲み取り、どんな声かけをしたのか。書くからこそ流さずに意識できます。

そして、「そんなねがいがあったのか」と気づいたり、「自分の汲み取りはまちがっていた」と振り返れたことも一度や二度ではありません。